

市民の目線に立った金沢パブリックアートプロジェクト No. 2

- 都市とアートの未来を描く

土田 義郎・谷 明彦（金沢工業大学）、鏑 隆弘（金沢美術工芸大学）、上坂 達朗（東洋設計）

はじめに

JUDI 北陸ブロックでは、平成 17～18 年（15 期）に公募制プロジェクトによって助成を受け、「市民の目線に立った金沢パブリックアートプロジェクト」を実施した。

この中で、金沢の駅前から 21 世紀美術館にいたるアートアベニュー沿いに設置されているパブリックアートを中心に、個々のアートのデータベース化と評価を行った。この評価では、一般市民、学生及び都市の専門家によって行ったが、それぞれの立場によってパブリックアートの見方に違いがあることが明かとなった。また一般市民の中には、はじめてじっくりと鑑賞したという人がほとんどであった。昨年の JUDI 総会・発表会での議論なども踏まえ、以下の事項が主な課題として整理された。

- ・パブリックアートでありながら、パブリック（市民）に親しまれていない。
- ・設置者、作者、市民、都市環境デザインの専門家の中で、さらなる議論が必要。
- ・市民自らがさまざまな都市政策にかかわるような仕組みづくりが必要。
- ・メンテナンスや撤去についてルールづくりが必要。

そこで今期は、設置者、作者を交えた議論の場を設けるとともに、あらためて一般市民や学生も加わりアートアベニューへ出向いての見学会及び再評価を行うなど、設置者、作者、一般市民としてなすべきことや、都市環境デザインに携わる我々の役割について検討を加え、パブリックアートが文字通り市民の目線に立ったものとなるような提言に繋げていきたい。

なお、本プロジェクトの効果としては、前年に引き続いて以下のものが考えられる。

1. まちのアイデンティティが高まる
2. 新しい市民参加の創出
3. ランドマーク機能の向上
4. アーティストの参加により、市民との交流が深まる。

パブリックアート見学会とアンケート

「アートアベニュー」に設置された作品のうち、金沢駅周辺の 13 作品などを見学した。さびが物議を呼んだ「CORPUS MINOR #1」や、歩道に背を向けて設置された「浄」など、置かれた環境も含め、あらかじめ作成された



会員、一般、学生など約 30 名が参加

評定用紙に基づき評価をしながら見学会を行った。

■評定用紙の内容

1. 個々のアート、およびその立地する環境について感想をプラス面とマイナス面から自由記述
2. 5段階の数値による評価
3. アートアベニューのあり方に関する全体としての感想・意見の自由記述
4. 今回見学した中で環境も含めたベスト3（次表）

評価では、前期に実施した評価・分析方法の検証といったことも含めて実施した。

アンケート結果を整理すると、作品が置かれている場所のデザインに、作者の意思が反映された「FUGA」や、まちのランドマーク機能を発揮している「CORPUS MINOR #1」の評価が高かった。

逆に、心臓をモチーフとした「鼓動」はグロテスクなイメージがあり、「岬」と「浄」の裸婦像は場所に調和していないといった印象から評価は低く、「場所がよくない」という指摘が多かった。評価の低い理由は、①気づかない、②環境とマッチしていない、③作品を生かされていないなどである。

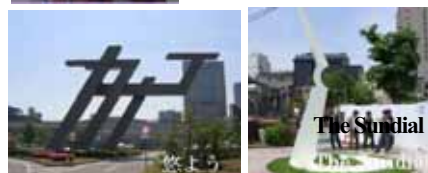
▼評価の高かった作品



▼評価が低かった作品



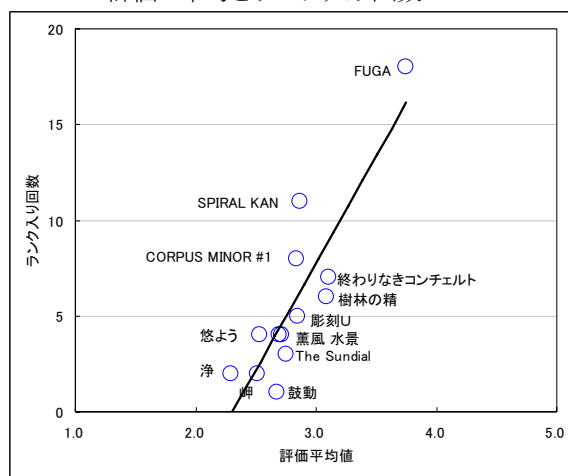
▼その他の見学作品



各パブリックアートのランク付け結果（人数）

	1位	1~3位
FUGA	8	18
SPIRAL KAN	4	11
CORPUS MINOR#1	2	8
終わりになきコンチェルト	3	7
樹林の精	0	6
彫刻U	1	5
薫風	2	4
水景	0	4
悠よう	2	4
The Sundial	0	3
浄	1	2
岬	1	2
鼓動	0	1

評価の平均とランク入り回数



フォーラム 北陸のパブリックアートを考える

フォーラムでは、コーディネーターに鏗隆弘金沢美術工芸大学准教授（JUDI 北陸）、パネラーにパブリックアートの設置者側として金沢 21 世紀美術館館長の秋元雄史氏を、作者の立場として金沢美術工芸大学（彫刻）の石田陽介氏を招き、JUDI 北陸から福井の坂田守正氏、富山の島津勝弘氏も加わり活発な議論が繰り広げられた。参加者は、JUDI 会員、一般市民、学生等を合わせて約 60 名の参加があった。



会員以外も含めて約60名参加、マスコミ取材もありました

◆設置者側の立場から

- ・市民参加型は過剰にやると問題がない作品がいいとい

うところに落ち着く傾向がある。

- ・日本にはパブリックアートを取り込んで、政策としてやった例はあまりない。
- ・作品の持っている美術的価値と、それが置かれた場所とその周りとの関係のなかで発する意義とは分けたほうがいい。
- ・パブリックの役割という視点で、その作品の意義を捉えようと、まず作品論から入るべきではなくて、街の政策論から入るべき。

◆作者の立場から

- ・アートを作る者として、頼まれれば喜んで製作するが、どこへ置かれたかという責任までは持ててなかったのが現状である。
- ・場所を与えられてから製作するというケースは、彫刻家にとっては皆無に近い。
- ・場を設定するのは建築家やトータルデザイナーで、創るほうは所謂プライベートなどから始まる。
- ・ちょっとした解説があるだけでも一般の人の感心の示し方が違ってくる。

◆都市環境デザインの立場から（JUDI メンバー）

- ・場を公共にするためのアートがパブリックアート。
- ・市民と関わっていくことによって、モニュメントやオブジェ、彫刻というものが生かされていく。
- ・議論することが、とても大事。賛否両論あつて質を高める。スポットで点として落ちたものを、市民の中にどう浸透させていくかが、都市環境デザインの仕事。
- ・我々がアピールする側に立ち、作家に対してどうか、場所空間としてふさわしいのかを明確にして、メッセージにする役割を担っているのではないか。

おわりに

今回のフォーラムでは、作者の立場から生の声を聴くことができた貴重な機会となった。フォーラム後の懇親会では、さらに他の作者にも意見を聴いてみるのが良いとの意見で一致した。

本プロジェクトの成果の取りまとめにおいては、フォーラム後に行った複数の美術作家へのインタビュー内容を含め、市民、設置者、美術作家、都市環境デザイナーの役割について整理をおこなう。

今後は、パブリックアートに対する提言をまとめ、都市環境デザイン会議や金沢市民に示すこととしたい。